

Pattern of Life の形成と固定

1) **Individual Psychology: Theory and Practice**. Guy Manaster, Raymond Corsini, 1982.
Chapter 7, The Development of Personality,
FIXED LIFE STYLE BY AGE FIVE pp91-92

An Adlerian “fact” is that life style is fixed by the age of four to six. “By the time a child is five years old his attitude to his environment is usually so fixed and mechanized that it proceeds in more or less the same direction for the rest of his life. His apperception of the external world remains the same” (Adler, 1956,;.189).

アドラー派の「事実」の一つは、ライフスタイルは4歳から6歳の間に固定するということです。「子供が5歳になる頃には、彼の環境に対する態度は通常固定され、機械的になっており、その後の人生でもほぼ同じ方向に進みます。彼の外界への認知は同じままです」(Adler, 1956, IAPP p.189)。

2) **Fundamentals of Adlerian Psychology**. Rudolf Dreikurs, 1953.
The Life Plan and the Life Style, p,43.

At birth the child encounters an unknown world and a mode of life which he has to learn. Above all he has to learn the rules of the human community, to perform functions and master the tasks set by life. **At first the child sees only that part of life and of the human community which is bounded by his environment, the family in which he is living. To him this environment means “life” and the members of the family seem to be “society”** and he attempts to adapt himself to them.

He seeks to maintain himself within this concrete group by means of a variety of acquired accomplishments, characteristics, modes of behavior, capacities and artifices. The difficulties he encounters have been outlined in previous chapters. If we now examine the situation more closely we find that the child is bound to get the impression that the difficulties he personally experiences are the absolute difficulties of life. He does not realize that the other people round about him are involved in conflicts of an entirely different nature. His growing intelligence prompts him to overcome the difficulties of his position, so far as this appears possible, unaided and alone.

This explains why every individual by the time he is four to six years old has developed a definite character and why any fundamental change of character after the fourth to sixth year is almost impossible without outside aid through psychotherapy. Character is therefore simply the manifestation of a certain plan which the child has evolved and to which he will adhere throughout the rest of his life.

出生時、子どもは知らない世界と、学ばなければならない生活の仕方に出会います。何よりも、人間の共同体のルールを学び、人生が課す機能を果たし、タスクをマスターする必要があります。最初のうちは、子どもは自分の環境に囲まれた生活と人間の共同体の一部しか見ておらず、彼にとってこの環境は「人生」であり、家族のメンバーは「社会」のように思われ、彼らに適応しようと試みます。

彼は、習得した多様な技能、特性、行動様式、能力、策略を用いて、この具体的な集団の中で自己を維持しようとします。彼が遭遇する困難は以前の章で説明されています。今、より詳しく状況を検討すると、子どもは、彼が個人的に経験する困難が人生の絶対的な困難であるという印象を受けざるを得ません。彼は、周囲の他の人々がまったく異なる性質の衝突に巻き込まれていることに気づきません。彼の成長する知性は、できる限りひとりで、支援や助けを借りずに、自分の立場の困難を克服するよう促します。

これが、どうしてすべての個人が4歳から6歳までには明確な性格を発展させ、4歳から6歳以降に性格を根本的に変えることが、心理療法を通じた外部の援助なしではほぼ不可能な理由を説明します。したがって、性格は単に、子どもが発展させ、その後の人生で固執する特定の計画の表れです。

(ChatGPT さんによる訳)

3) Basic Applications of Adlerian Psychology for Self-Understanding and Human Relationships. Outlines of a course. Edith A. Dewey, 1978.

Life Style, p.14

One's life style is developed during the first 4-7 (opinions of Adlerians vary) years of life.

during preschool years	concepts are being formed, are easily changed
during school years	concepts may be altered by experiences
in adolescence	one learns to cover up feelings, deceive oneself, "wear a mask" and keep the convictions one has
in adult life	life style is quite fixed and is usually changed only by psychotherapy, but in some cases life itself may be therapeutic and one can be "brainwashed."

Brain damage and senile syndromes caused by changes in the brain may change life style.

ライフスタイルは4歳から7歳（アドレリアンによって意見が分かれる）の間に発達する。

就学前：概念形成 簡単に変化する

就学期：体験によって変わり得る

思春期：感情隠蔽、自己欺瞞、「マスクをつける」ことを覚える 信念が保持される

成人期：ライフスタイルは固定され、通常は心理療法によってのみ変化する

ときに、人生そのものが治療的に作用し「洗脳」されることもある

脳の変化による脳障害や老人性症候群は、ライフスタイルを変える可能性がある。

4) 『アドラー心理学トーキングセミナー：性格はいつでも変えられる』野田俊作、1999.
第1部 性格 4, 性格という辞書はどのように作られるんですか？

●性格の形成について考える前に、性格の固定について、まず考えてみたいんです。そうすると、いろんなことがわかっていただけだと思う…。

どんな経過をたどってにせよ性格が形成されて、ある時点で性格の形成が止まるわけですね。アドラー心理学は、性格がほぼ完成するのがだいたい十歳ぐらいだろうと見当をつけているんです。フロイト派なんかよりもずっと性格形成の時期を遅くおいていまして、本格的に始まるのが三歳ぐらいで、だいたいできあがるのが十歳ぐらいだろうと思っているんです。完全に固定しちゃうのは思春期の終わりごろ、二十歳を過ぎてからじゃないかな。

十歳ぐらいで、一応は性格形成は止まるんだけど、いったいなぜ止まるんだろうか、という議論がありましてね。不思議だと思いませんか？一生発達しつづけてもよさそうなのにな。

●大脳生理学的にみて、そのころに脳の発達が止まるというのではないようです。脳が発達をやめるのは、もっと後になってからだと思います。ですから、性格の発達が止まるのは脳の問題ではないんです。そうではなくて、心理的な問題なんです。

あなた自身が小学校の上級生か中学生ぐらいの頃のことをちょっと思い出してみてください。なんとなくそのころ、急に大人の世界が見えてきたような感じがしませんでしたか。それまでは、自分のことを子どもだと思っていたけれど、そのころになると、もう自分は子どもじゃないんだって思うようになるでしょう。もう何だって知ってるんだぞって。

●もう大人だぞと感じると、安心して、そこからもう動かなくなる。成長するのをやめるんです。…性格が固定するというのは、実は、主体的な決断、「おれはもうこれ以上性格を変えないぞ」という決断のためだと思うんです。「もうこれでいいだろうから、これ以上成長するのをやめよう」という決断をするんですよね。それで性格の発達が止まるんだろうと思うんです。

——性格の形成がだいたい三歳ごろにはじまって十歳ごろ終わるというのは、何か根拠があるんですか？

●観察にもとづく結論です。アドラーはね、固定する年齢をだんだん引き上げていったんです。古い文献を読んでいると、四、五歳にもう固定するなんて書いているんです。彼が死ぬころには、だいたい十歳という線を出したんです。

その後、後継者たちがまた年齢を引き上げまして、今は、思春期が終わるころには完全に固定する、という言いかたをする人が多いですね。観察事実の積み重ねから、思ったよりも性格っていうのは年をとっても変わってゆくんだなって思わざるをえないことがたくさんありましたから…。

アドラーは、今で言えば児童精神科医で、自分で子どもを治療しながら理論を組み立てていった。彼の活動の舞台は児童相談所で、彼の患者さんは問題児たちだったんです。それも、神経症の子どもよりも、非行とか学校不適應の子どもたちが多かったようですね。つまり、病気の子どものじゃなくって、正常な子どもたちです。普通の子どもたちをたくさん診ている。だから、ナマなんです。とにかく、フロイト的な先入観なしに子どもを観察すると、性格は案外大きくなってからでも自然に変わることがあることに気づく。

——ところで、三歳から性格形成が本格的にスタートするということですが、0歳から二、三歳のころはどうなっているんですか？

●もちろん、そのころからスタートしているんでしょが、確かめようがないでしょう。

●子どもに聞いても答えてくれないからね。…聞いて答えてくれないことについては、つまり観察不可能なことについては、「わからない」というのが、もっとも科学的な態度じゃないかな。われわれが子どもと話ができるのは、子どもに言語能力ができてから、つまり、三歳ぐらいからでしょう。その時点では、性格の原型とでもいうべきものがたしかに存在していることは、観察できる。当然、性格形成は、生まれた瞬間からはじまっているんだろうけれども、三歳ぐらいまでのプロセスは謎なんですよ。

●すくなくとも、条件反射は形成されますよね。それも性格の一部には違いない。

でもね、今ここで性格とっているもの、アドラー心理学がライフスタイルとっているものは、言語的なものですよ。信念の体系だから。思考だから…。非言語的なもの、たとえば条件反射的なものも、たしかにライフスタイルの一部ではあるけれども、われわれの日常生活の行動を動かしているのは、条件反射的な部分よりも、心理学用語でいう認知的な部分、つまりは言語的な部分のほうがはるかに大きいと思うんです。だから、われわれが問題にしているのは、性格の中の、認知的な、言語的な部分です。そうすると、それが本格的に形成されるのは、やはり、言語が使えるようになった三歳ぐらいからになると言わざるをえない。